

サウス・カロライナ植民地における鹿皮貿易, 1735–1775年

柳生 智子^{*1)}

I. 序

サウス・カロライナ植民地では17世紀後半から鹿皮 (deerskin) が最も重要な輸出品目であった。18世紀には米の輸出で繁栄するが、米が最重要輸出作物になる以前は鹿皮の輸出が最も多く、その後植民地時代の末期まで同植民地からの輸出量では常に2番目か3番目に多かった。鹿皮貿易は北米南部の植民地では、ヨーロッパ人とネイティブアメリカン (先住民, 以下インディアン) との接点・交流をもたらし、入植者は鹿皮を提供するインディアン部族との同盟関係の維持を重視した。ヨーロッパ諸国にとって鹿皮貿易は北米支配の最前線における経済活動であり、その取引はインディアン社会に大きな変容をもたらした。歴史家グレイはインディアンとの取引を植民地の経済成長の最初期段階に位置づけ、インディアン取引による大陸荒野への進出は農地の開拓につながり、その利益は植民地における農業の発展につながる資本を準備し、農業生産が定着するまでの植民地経済を支えたと分析している。²⁾ サウス・カロライナ植民地の18世紀の繁栄を支えた米やインディゴの

輸出の前の時期、鹿皮貿易は植民地経済にとって最も重要な貿易であり、植民地時代末期まで貴重な輸出品の1つであり続けたが、18世紀半ば頃には輸出は減少していく。

本稿ではサウス・カロライナ植民地の入植者と南東部インディアン部族間の鹿皮取引と鹿皮貿易の輪郭を描いた上で、鹿皮貿易の中心地であったチャールストンにおける取引商人に焦点を当てる。その際、資料はサウス・カロライナ州コロンビアにあるSouth Carolina Department of Archives and Historyに残されたサウス・カロライナ植民地財務局の記録, Records of the Public Treasurer of South Carolina (1735–1775年) にある鹿皮輸出関税の支払記録を中心に、同時代商人の書簡、統計史料などを併用し、鹿皮貿易に関わった商人層の特色、および18世紀の鹿皮貿易の隆盛と後退について論じる。チャールストンおよびサウス・カロライナ植民地は18世紀に大規模な黒人奴隷労働に依存する米作プランテーションの展開によって環大西洋経済圏への輸出貿易の1拠点として成長するが、その過程において鹿皮貿易の果たした役割とその意義、貿易商人層の形成およびその変容について検討する。³⁾

*柳生智子 (Tomoko YAGYU) : 慶應義塾大学経済学部。

¹⁾本研究は科研費2018年度「環大西洋経済圏におけるアメリカ南部と西インド諸島の奴隷貿易の展開」基盤研究(C)の成果の一部である。

²⁾Lewis Cecil Gray, *History of Agriculture in the United States to 1860, Vol. I* (Washington D.C., Carnegie Institution, 1933, reprint, Augustus M. Kelley Publishers, Clifton, NJ, 1973) 129.

³⁾Records of the Public Treasurer of South Carolina, Journal A (1735-1748), Journal B (1748-1765), Journal C (1765-1776). manuscripts division, South Carolina Department of Archives and History (Columbia, South Carolina).

II. チャールストンと鹿皮貿易研究

サウス・カロライナ植民地の貿易の中心はチャールストンであった。1670年の建設以降、バルバドスやイギリス本土からの移民が定住し、大西洋貿易により植民地期の南部最大の貿易港としてフィラデルフィアやニューヨークなど北部諸都市と並ぶほどに成長した。独立戦争直前にはチャールストンは北米植民地で4番目に大きな都市に成長し、1768年から1772年の13植民地からの全輸出の3分の1、全輸入の12%を占めた。チャールストンは早くから鹿皮と船舶用品 (naval stores, 森林で採取されるタール、松脂など) を輸出し、18世紀初頭には米、1740年代からはインディゴの輸出が隆盛した。⁴⁾

チャールストンの商人層も都市の成長とともに発達した。植民地時代を通して重要な輸出品であった鹿皮は、18世紀半ばには米やインディゴに比べて相対的に重要度が減少し、これまでクレインの先駆的な研究の影響から、ローカントリー一帯で1720～30年代に急増したプランテーションの隆盛が鹿皮貿易の後退を決定づけたと理解されてきた。しかし近年では経済史家マンコールらの研究によって、鹿皮貿易自体はその後も活気ある貿易として独立期まで継続したことが示されている。⁵⁾

南部の鹿皮貿易の発展には鹿を捕獲する内陸インディアンとの鹿皮取引の成立が必要であった。北米植民地の昨今のインディアン史におい

ては、大西洋を挟む大陸間の人、財、資本などの移動の複雑な相互関係を解明する大西洋研究と、植民地人との共生を目指しながら相手からの譲歩を誘導するインディアンへの適応力・対応力を強調する大陸史のアプローチ、双方の認識が欠かせない。鹿皮取引は、鹿皮を提供するインディアンを大西洋経済圏に組み入れると同時に、南東部諸部族がイギリスだけでなくフランスやスペイン勢力とも牽制し合いながら鹿皮取引に主体的に関わってその枠組みを形成する交渉力・手段を有したとされており、その分析には大西洋史、大陸史両方の視点を要する。近年、鹿皮取引は初期段階においてヨーロッパ諸国がインディアン社会に迎合する形で、インディアン主導によって展開したが、貿易の拡大に伴う大量のヨーロッパ商品の流入などで徐々にインディアンの伝統的な文化の変容や崩壊、生活全般や資金面での依存を引き起こし、部族が経済的・政治的独立性を失い、植民地に屈していく経緯が分析されてきている。さらに、鹿皮が要因となった戦争・紛争、鹿捕獲の生態系や環境への影響など、取引に関する論点が多岐にわたるようになっている。ヨーロッパとインディアンの接点について多様な視角と解釈が見られる中、鹿皮貿易がインディアン社会にもたらした変化や衝撃を改めて考察することが必要な段階にある。⁶⁾

⁴⁾Peter A. Coclanis, *The Shadow of a Dream: Economic Life and Death in the South Carolina Low Country, 1670-1920* (New York: Oxford University Press, 1989)48-110.

⁵⁾Verner W. Crane, *The Southern Frontier, 1670-1732* (Durham, NC: Duke University Press, 1928); Peter C. Mancall, Joshua L. Rosenbloom, and Thomas Weiss, "Indians and the Economy of Eighteenth-Century Carolina," in Peter A. Coclanis, ed. *The Atlantic Economy during the Seventeenth and Eighteenth Centuries: Organization, Operation, Practice, and Personnel* (Columbia: University of South Carolina Press, 2005) 298-9.

⁶⁾Paul W. Mapp, "Atlantic History from Imperial, Continental, and Pacific Perspectives," *William and Mary Quarterly*, 3rd ser., 63 (2006), 713-724. クリーク族の交渉や戦略についてはKathryn E. Holland Braund, *Deerskins & Duffels: The Creek Indian Trade with Anglo-America, 1685-1815* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1993); Claudio Saunt, *A New Order of Things: Property, Power, and the Transformation of the Creek Indians, 1733-1816* (Cambridge, MA: Cambridge University Press, 1999) など参照。カトーバ族についてはJames Merrell, *The Indian's New World: Catawbas and their Neighbors from European Contact through the Era of Removal* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1989). チェロキー族についてはTom Hatley, *The Dividing Paths: Cherokees and South Carolinians through the Era of Revolution* (New York: Oxford University Press,

一方、チャールストンの貿易についての研究は多々あるが、鹿皮貿易を中心に据えたものはほとんどない。18世紀にはサウス・カロライナ植民地の奴隷人口が急増し、ローカントリーの奴隷輸入の玄関口であったチャールストンは大西洋奴隷貿易の北米拠点として成長したことから、奴隷貿易に関する研究は豊富にある。また、18世紀に最大の輸出作物になる米貿易の研究も蓄積がある。一方、チャールストンの商人の研究に関しては、個別の商人の書簡・文書は北部の大都市に比べて少ないが、イギリスや西インド諸島との商人のつながりやネットワークについては近年関心が高く、やはり奴隷貿易を中心に、大西洋経済圏における商人について多くのことが明らかにされてきた。これまでの研究でも、チャールストンは設立当初からイギリス商人と緊密なつながりを持ち、大西洋貿易に従事する商人層を形成していたことは分析されている。コクラニスによるサウス・カロライナ植民地の社会分析など、環大西洋経済圏におけるチャールストンについては2000年代以降、研究が大いに進んだ。しかし、鹿皮貿易についてはインディ

アンとの交流についても、貿易の特徴についても、大局的な分析には至っていない。⁷⁾

本稿では近年の大西洋貿易やその商人活動の

⁷⁾ 植民地期カロライナの政治経済を扱った研究としてM. Eugene Sirmans, *Colonial South Carolina: A Political History, 1663-1763* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1966); Converse D. Clowse, *Measuring Charleston's Overseas Commerce, 1717-1767: Statistics from the Port Naval Lists* (Washington D.C.: University Press of America, 1981); Huw David, *Trade, Politics and Revolution: South Carolina and Britain's Atlantic Commerce, 1730-1790* (Columbia: University of South Carolina Press, 2018) などがある。ClowseやSellersの研究は植民地期チャールストンの貿易、商業を概説している。Leila Sellers, *Charleston Business on the Eve of the American Revolution* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1934); Converse D. Clowse, *Economic Beginnings in Colonial South Carolina, 1670-1730* (Columbia: University of South Carolina Press, 1971). 商人やプランター層についてはEmma Hart, *Building Charleston: Town and Society in the Eighteenth-Century British Atlantic World* (Columbia: University of South Carolina Press, 2010); Richard Waterhouse, *A New World Gentry: The Making of a Merchant and Planter Class in South Carolina, 1670-1770* (New York: Garland Publishing, 1989); R.C. Nash, "South Carolina and the Atlantic Economy in the Late Seventeenth and Eighteenth Centuries" *Economic History Review* 45, no.4 (Nov. 1992), 677-702; R.C. Nash, "Trade and Business in Eighteenth Century South Carolina: The Career of John Guerard, Merchant and Planter" *South Carolina Historical Magazine* 96, no.1, (Jan., 1995) 6-29. サウス・カロライナと奴隷制研究、米貿易については以下参照。Elizabeth Donnan ed. *Documents Illustrative of the Slave Trade to America, Vol. 4* (Washington D.C.: Carnegie Institute, 1930-35); Peter H. Wood, *Black Majority: Negroes in Colonial South Carolina from 1670 to the Stono Rebellion* (New York: Knopf, 1971); Coclanis, *The Shadow of a Dream*; Daniel Littlefield, *Rice and Slaves: Ethnicity and the Slave Trade in Colonial South Carolina* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981); David Richardson, "The British Slave Trade to Colonial South Carolina" *Slavery and Abolition* 12, no.3 (Dec. 1991), 125-172; Ryan A. Quintana, *Making a Slave State: Political Development in Early South Carolina* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2018); Edward B. Rugemer, *Slave Law and the Politics of Resistance in the Early Atlantic World* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2018). サウス・カロライナ植民地と環大西洋経済圏に関して、Coclanis ed. *The Atlantic Economy during the Seventeenth and Eighteenth Centuries*; Jack P. Greene, Rosemary Brana-Shute, and Randy J. Sparks eds., *Money, Trade and Power: The Evolution of Colonial South Carolina's Plantation Society* (Columbia: University of South Carolina Press, 2001).

1993). その他、近年の研究としてDaniel K. Richter, *Facing East from Indian Country: A Native History of Early America* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2001); Drew A. Swanson, *Beyond the Mountains: Commodifying Appalachian Environments* (Athens: University of Georgia Press, 2018); Kathleen Duval, *The Native Ground: Indians and Colonists in the Heart of the Continent* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2006); Elizabeth A. Fenn, *Pox Americana: The Great Smallpox Epidemic of 1775-1782* (New York: Hill and Wang, 2001); Charles Hudson and Carmen Chaves Tesser eds. *The Forgotten Centuries: Indians and Europeans in the American South, 1521-1704* (Athens: University of Georgia Press, 1994). ミシシッピ文化の時代から18世紀初め(1540~1730年)にかけての約200年間にわたる北米インディアン社会の崩壊と変容をShatter Zoneとし、インディアン部族のヨーロッパ諸国との対応・交渉の多様性を分析した研究者らが新たな見解を次々と発表している。その主唱者であるRobbie Ethridgeの研究、とりわけ以下を参照。Robbie Ethridge and Sheri M. Shuck-Hall eds. *Mapping the Mississippi Shatter Zone: The Colonial Indian Slave Trade and Regional Instability in the American South* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2009)

研究, インディアンとの取引に関する研究などの成果を踏まえて, サウス・カロライナ植民地の鹿皮輸出の輪郭を描き, 輸出にあたった商人層の特色と変容について, これまで十分に利用されていなかった資料を元に分析する。本稿の分析により, 鹿皮貿易が植民地期サウス・カロライナの貿易の発展に先導的な役割を果たし, チャールストンの商人層の発達・形成と対外貿易の拡大に重大な貢献をしたことを明らかにする。

Ⅲ. 鹿皮取引の特色

鹿皮取引は1640年代にヴァージニア植民地の入植者やフロリダ植民地のサン・オーガスティンにいたスペイン勢が内陸へと開拓を進め, インディアンと接触したことで開始した。17世紀半ば以降, アメリカの安価な皮製品需要はヨーロッパで増加傾向を示し, 17世紀末までにはチャールストンが北米植民地南部の鹿皮輸出の中心港となった。鹿皮の取引の開始と同時に, ヨーロッパの鉄や羊毛などがサウス・カロライナに輸入されるようになった。南北に分裂する前のカロライナ植民地は1663年に設立し, 1674年に領主によってインディアン領域に派遣された人物が, ウェスト族と取引を開始したのがインディアンとの取引の始まりと言われる。植民地の初期には周辺のインディアンとの取引が中心で, 遠方のインディアンとの取引は領主が独占していた。⁸⁾

⁸⁾Mancall, Rosenbloom, and Weiss, "Indians and the Economy," 298-9. カロライナ植民地は1710年頃には南北の地区に分けられ, 正式には1729年にノース・カロライナ植民地とサウス・カロライナ植民地となるが, 本稿では1729年以前の時期でもサウス・カロライナ植民地と呼ぶ。イギリスも正式には1707年以前の名称はイングランドを指す。Wilma A. Dunaway, "The Southern Fur Trade and the Incorporation of Southern Appalachia into the World Economy, 1690-1763" *(Fernand Braudel Center)* Vol 17, no. 2 (spring, 1994) 225-6, 219-220. Eric Hinderaker and Peter C. Mancall, *At the Edge of Empire: The Backcountry in British North America* (Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 2003) 74. Greg O'Brien, "Indian Eras, Deerskin Trade, 1700-1800" in Charles Reagan Wilson ed. *The New Encyclopedia of*

北米大陸の南部地域では, スペインが1560年代にはフロリダの植民地化に成功しスペイン帝国の軍事的緩衝地帯として維持し続ける一方, 17世紀中に北東部とカナダを中心にインディアンとの取引を拡大していたフランスが更なる同盟の拡大を目論み, 1699年にミシシッピ川沿いに新たにルイジアナ植民地を設けたことで, イギリス植民地は両勢力に取り囲まれる形となった。各国は徐々に複数の南東部インディアン部族と友好関係・政治的同盟関係を持つようになった。インディアンとの関係を築く中でとりわけ鹿皮の取引は両者の交流の起点となった。インディアンが秋から冬にかけて内陸で狩猟する鹿の捕獲と皮の処理はいずれも高度な技術を要し, イギリスはその供給状況に依存する形で取引は形成されていった。対価として準備されたイギリスの精度の高い銃・弾薬はインディアンに好まれ, イギリス植民地の商人は17世紀末からインディアンとの取引に特化したトレーダーを仲介者として雇う一方, インディアン社会に溶け込もうとインディアンと婚姻関係を結び交流・親睦を深めるなどして内陸の広範な地域を治めるクリーク族をはじめ, 複数の部族と堅固な取引を築いていった。1736年のサウス・カロライナ・ガゼット紙では, 「インディアン取引はこの植民地の繁栄にとって最も重要であり, (鹿皮は) イギリスへの輸出の5分の1を占めるだけでなく, この植民地の周辺の複数のインディアン部族と我々の友好・親善を維持する手段でもあり, その結果, インディアンがフランスやスペイン側につくのを防ぐ効果もある」とあり, 鹿皮取引の確保が植民地にとって他のヨーロッパ諸国との対抗という面で政治的に重要であっ

Southern Culture, Vol. 3, History (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2006) 149-151; Braund, *Deerskins & Duffels*, 42; Steven J. Oatis, *A Colonial Complex: South Carolina's Frontiers in the Era of the Yamasee War, 1680-1730* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 2004) 23; Stern, *Lives in Objects*, 123.

たことを示している。⁹⁾

鹿皮取引でインディアンは金属製品や嗜好品、繊維製品などを手にし、取引品の中でも特に銃と火薬・弾薬が最も多くの鹿皮を要した。¹⁰⁾ チャールストンの大商人で鹿皮取引にも関わったロバート・プリングル (Robert Pringle) の書簡では度々銃の高額取引に触れ、1740年には「4丁の銃やピストルその他を受け取ったが、とりわけインディアンとの銃の交換は今までで最も高額で取引されている」と報告している。さらに「送られた弾薬は質が非常に悪く、ほとんど売ることができず、苦情ばかり届く」といった製品の質の問題を指摘する他、丈夫な厚手のダブル地の取引も好まれている、などのインディアンとの取引の状況を報告している。¹¹⁾ 一方、

植民地の商人に雇われた取引仲介人であるトレーダーは鹿皮取引の際にインディアンにラム酒を提供し、インディアン社会にアルコール依存による多くの弊害が生じることになる。当初はインディアン社会やその好みに迎合し、イギリス側が依存する形で始まった鹿皮の取引も、取引商品の量や種類の拡大、インディアン社会におけるイギリス商品の利便性の浸透などから次第にインディアン側がイギリスの提供する物品に頼る構造へと変化し、その結果としてインディアン社会の伝統的な生活様式は崩壊へ向かうことになった。鹿皮取引は特に18世紀初頭までは取引に関する規制もほぼなく、植民地側の不正や蛮行が横行し、多くの部族が取引による負債を抱えるようになった。1711年のチェロキー族のイギリスへの負債は100,000枚の鹿皮相当に膨れ上がった。¹²⁾ 1715年に勃発したヤマシー戦争を機に、鹿皮をはじめインディアン取引に関する規制が大幅に改良され、一時政府の専売制に移行したのち再度自由化するが、取引範囲や信用貸付の制限、価格の標準化などの規制は植民地時代末期まで継続した。¹³⁾

インディアンとの交渉後、鹿皮が輸出されるまでは定まった過程を進んでいく。インディアンによって捕獲された鹿はインディアン女性によって丁寧に皮を剥がれ、加工された皮の重さ

⁹⁾ イギリス商品が他国品より好まれた件について、Braund, *Deerskins & Duffels*, 36-40. Gray, *History of Agriculture*, 134-5. トレーダーについては以下も参照。Eirlys M. Barker, "Indian Traders, Charles Town, and London's Vital Links to the Interior of North America, 1717-1755," in Greene, et al eds. *Money, Trade, and Power*, 143-6; Hatley, *The Dividing Paths*, chap.4. 引用は*South Carolina Gazette*, July 3, 1736 in Crane, *Southern Frontier*, 115. 植民地期アメリカの全体像についてはAlan Taylor, *American Colonies: The Settling of North America* (Penguin Books, 2001), S.E.モリソン (西川正身翻訳監修)『アメリカの歴史Ⅰ—先史時代～1778年』(集英社文庫, 1997年) アラン・テイラー (橋川健竜訳)『先住民vs.帝国 興亡のアメリカ史—北米大陸をめぐるグローバル・ヒストリー—』(ミネルヴァ書房, 2020年) など参照。

¹⁰⁾ ある交換表では、1丁の銃で35枚の鹿皮、中程度の厚みのコートが35枚、キャリコのパチコートで14枚、ピストルで20枚、白ブランケットで16枚、ストラウド1ヤードで8枚、大きめの鍬で5枚、狭めの鍬は3枚、シャツ5枚、など細かく決められた。1枚の皮だと30の弾丸、1本のナイフ、1挺のはさみ、12の火打石に相当した。Philip M. Brown, "Early Indian Trade in the Development of South Carolina: Politics, Economics, and Social Mobility during the Proprietary Period, 1670-1719," *The South Carolina Historical Magazine*, vol. 76, no. 3 (July, 1975) 123-4.

¹¹⁾ Walter D. Edgar, *The Letterbook of Robert Pringle, Vol. 1,2* (Columbia: University of South Carolina Press, 1989) May 4, 1739, p.85; May 12, 1740, p.202. 18世紀半ばでもマスケット銃1丁に最低でも16枚の鹿皮が必要であった。ヨーロッパ製品の所有によって保障される高い社会的地位は製造品・輸入品への依存度を高め、インディアン社会を蝕んでいく。例として、Richard White, *The Roots of Dependency: Subsistence, Environment, and Social Change among the Choctaws, Pawnees, and Navajos* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1983).

¹²⁾ O'Brien, "Indian Eras" 151. Dunaway, "The Southern Fur Trade" 231. インディアン社会におけるアルコールの弊害についてはPeter C. Mancall, *Deadly Medicine: Indians and Alcohol in Early America* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1995) など参照。ラム酒価格を不当につり上げ、水で薄め、計量器の不正などでインディアンを騙した記録がある。Braund, *Deerskin & Duffels*, 50, 104-5; Pressly, *On the Rim*, 205-6.

¹³⁾ ヤマシー戦争の詳細な経緯について、Crane, *Southern Frontier*, 162-186; Oatis, *Colonial Complex*, chap. 4,5,6; William L. Ramsey, *The Yamasee War: A Study of Culture, Economy, and Conflict in the Colonial South* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2008) を参照のこと。チカソー族以外の主要な南東部インディアンはヤマシー族に協力した。Braund, *Deerskins & Duffels*, 34-36.

は平均して2ポンドほどであったが、サウス・カロライナやジョージア植民地はフロリダなど他地域で取引された鹿皮に比べて倍以上の重さで皮質も良かった。¹⁴⁾ インディアンと直接交渉したのはトレーダーで、取引後、鹿皮は馬借によってチャールストンまで運ばれた。チャールストンに到着すると、鹿皮は輸出商人の手に渡り、彼らによって入念に皮質等が調べられ、輸出向けに荷造りし、輸出関税を支払った上でイギリス主要都市や北部植民地にも一部出荷された。¹⁵⁾ 鹿皮を扱った大商人にはサミュエル・エヴェレー (Samuel Eveleigh), ベンジャミン・ステッド (Benjamin Stead), ジェイムズ・クロカット (James Crokatt), ヘンリー・ローレンス (Henry Laurens), サミュエル・ラッグ (Samuel Wragg) とジョセフ・ラッグ

(Joseph Wragg), チャールズ・ヒル (Charles Hill) など植民地期チャールストンを代表する有力商人たちがいた。プリングルの書簡では、鹿皮を輸出したイギリス諸都市の商人あての手紙に、「とても良質の鹿皮2 hog's head 分の船荷証券 (引換証) と価格を確認してください。船名はウィリアム、船主はジョン・カーターでロンドンの貴方の資金とリスクによるものです」など積荷情報や負債状況などを記し、同時にチャールストンの供給や社会状況なども知らせた。¹⁶⁾ 彼らの多くは、チャールストンに輸入された奴隷や一般商品の取引にも関わっていたことが輸出入関税の記録から判明しており、鹿皮貿易だけに専念したことはなかった。しかし、18世紀前半まではチャールストン商人が扱う商品の中で鹿皮が占める比重は高かった。

チャールストンからの鹿皮の大半はロンドンかブリistolに出荷された。両都市に出荷される割合は、1717-20年に輸出された鹿皮の90%、1758-60年では94%を占めた。¹⁷⁾ サウス・カロライナ植民地財務局 (Public Treasurer of South Carolina) の鹿皮輸出関税支払記録にある鹿皮の輸出先 (1735-1775年、計3622の取引記録) が【図表1】で示される。この記録からも確認できるように、ロンドンとブリistolへの輸出が非常に多く、両都市への輸出がこの期間の輸出全体の85%近くを占めた。イギリスに到着した鹿皮はロシア、アジア、南米など他地域から入ってきた獣皮とともに、多様な製品に加工された。¹⁸⁾ 一方、イギリス諸都市で作ら

¹⁴⁾ 輸出された鹿皮は上着、ズボン、軍服、手袋、帽子、馬具、鞍、太鼓の皮など幅広い用途があった。Robert M. Wier, *Colonial South Carolina, A History* (Millwood, NY: KTO Press, 1983) 16-7, 26-7; Dunaway, "The Southern Fur Trade" 225-6; Denise I. Bossy, "Godin & Co. Charleston Merchants and the Indian Trade, 1674-1715" *The South Carolina Historical Magazine*, Vol. 114, no. 2 (April 2013) 118 fn54. クリーク族の例では、年間猟師1人当たり100ポンドの鹿皮、つまり2ポンド平均の皮の重さを考えると年間猟師1人当たり50頭程度捕獲した。Braund, *Deerskins & Duffels*, 67-71.

¹⁵⁾ 鹿皮は加工済、半加工、加工なしの3種類に分類された。加工済のものはインディアンの手によって既に処理が施され、半加工のものは肉や毛は削がれたものの、まだ加工が必要な状態であった。未加工のものは生皮、緑皮、「毛のついた皮」などとも呼ばれ、ほとんど加工が施されておらず肉も毛も取られていなかった。加工済のものが最も腐敗の可能性が少ないことから、価値が高かった。Braund, *Deerskins & Duffels*, 88. 馬借はインディアン社会から鹿皮を運搬する長い馬の隊列を管理し、必要な道具をそろえる仕事であった。1735年には800頭以上の馬が鹿皮取引に使われたといわれる。Barker, "Indian Traders," 152-5; Braund, *Deerskins & Duffels*, 90-96. なお、狩猟の時期が主として冬にであったため、チャールストンに鹿皮が集まるのは春の終わりから夏が一番多かったと言われるが、植民地の関税記録を確認すると、1735年3月から1748年3月までの期間、3月~9月の間に輸出された回数は770、9月から翌年3月までの回数は559となり、春から夏にかけての3月から9月が全体の58%と若干多い程度であった。鹿皮貿易は基本的には1年中、行われていたと考えてよい。Records of the Public Treasurers, Journal A. SCDAH.

¹⁶⁾ Edgar, *Letterbook of Robert Pringle vol. 1* (July 4, 1738) p.17. プリングルの書簡は、鹿皮の集荷状況、米の生産状況、それぞれの価格動向などに加え、ストノ反乱の社会への影響、チャールストンでおきた大火、植民地政府や周辺インディアンの動向など内容は多岐にわたる。

¹⁷⁾ Clowse, *Measuring*, 54-55.

¹⁸⁾ Records of the Public Treasurers of South Carolina, Journal A (1735-1748), Journal B (1748-1765), Journal C (1765-1776). South Carolina Department of Archives and History, manuscript division (Columbia, South Carolina). Stern, *Lives in Objects*, 123.

れた銃や鉄製品、衣料品などがロンドンやブリistolに運ばれ、他のヨーロッパ諸国やインド、中国からの諸産物とともに植民地に向けて輸出された。鹿皮の輸出先は合計36地点あり、ニューヨークやフィラデルフィアなど北部植民地の都市にも輸出されたが、全体の10%弱しか占めなかった。¹⁹⁾

【図表 1】チャールストンから出荷された鹿皮の輸出先，1735－1775年

輸出先	出荷船舶数
London	1668
Bristol	1382
Boston	148
Philadelphia	64
Liverpool	47
Cowes	50
New York	49
Topsham	44
Rhode Island (Providence含む)	25
Poole	23
Georgia	18
Hull	17
Salem	11
Glasgow	11
Lancaster	11
Savannah	4
Cape Fear	4
Leith	3
Frederica	3

（出典）Records of the Public Treasurer of South Carolina, Journal A, B, C.

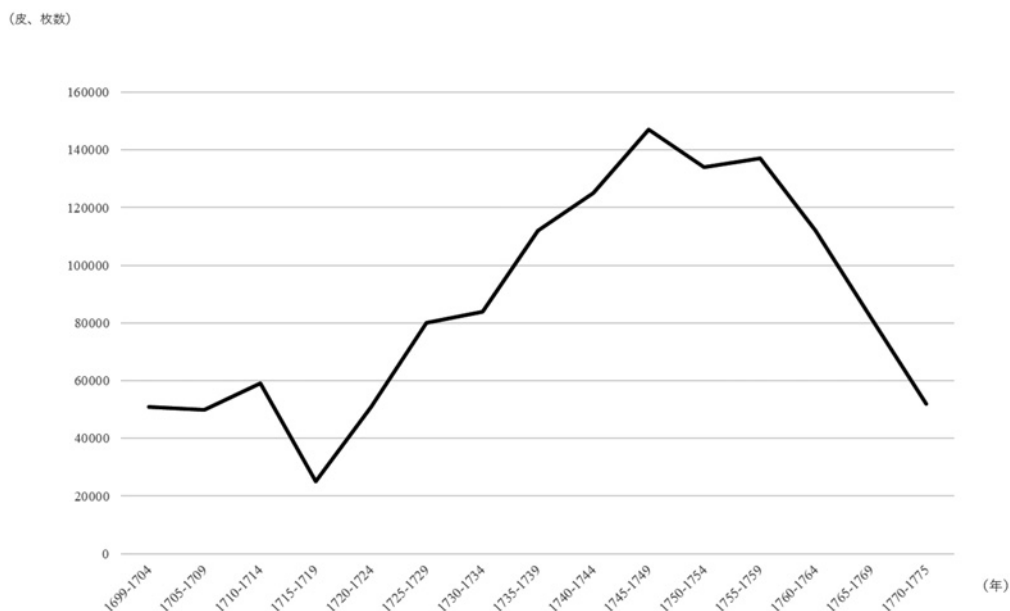
（注）輸出先が確認できる出荷船舶数の合計は3604隻。図表では2隻以下は省略したが、2隻はNorth Carolina, New England, Mobile, Hamburgh, Falmouthの5か所、1隻のみはYork, Whitehaven, St. Augustine, Winyah, Portsmouth, Plymouth, Newport, Newberry, New Haven, Jerseys, Dundee, Dunbarの12カ所。

¹⁹⁾ チャールストンからの輸出先では北部植民地の諸都市は10%弱であったが、南部植民地全体を見ると、鹿皮の5%ほどが北部植民地に向かった。Dunaway, “The Southern Fur Trade” 227-8; Clowse, *Measuring*, 35-8.

チャールストンからの鹿皮輸出量をクラウドの収集した統計から作成したのが【図表 2】である。鹿皮の輸出記録は枚数のものと、重量の記録の両方がある。最初期の正確な記録は存在しないが、1699年から1715年までにイギリスが輸入した鹿皮の年間平均は約54,000皮で、この間の1706年12月からの1年間に最多の121,335皮が輸出された。【図表 2】は鹿皮輸出枚数の5年平均値の推移を示している。1715－1719年に輸出が激減したのは1715年に植民地と近隣のヤマシー族を中心としたインディアンと衝突したヤマシー戦争が原因であり、インディアンからの鹿皮の確保が困難になった結果、1716年には4702枚しか輸出されず、戦争期間中は年平均25,000枚ほどに輸出枚数は落ち込んだ。1721年には戦前の数値に回復し、その年に約60,000枚輸出されているが、その後再び近隣のクリーク族と衝突し、チェロキー族とも紛争が生じるなど、鹿皮の供給が確保できず、順調な回復にはならなかった。1730年代からの約20年間は内陸のオーガスタを拠点としたトレーダーがクリーク族やチカソー族、チョクトー族領域へと前進していった時期であり、取引量が拡大し輸出の最盛期を迎えた。1748年には700ホッグスヘッド、160,000枚以上が輸出されている。²⁰⁾ 1750年代初めに一時減少するが、その後再び上昇したのち、後退していく。1760年代になるとジョージア植民地のサバンナからも100,000～150,000枚ほど輸出され、チャールストンの輸出量とほぼ並んだ。南部地域全体で見るとフランス領ニュー

²⁰⁾ Clowseのデータは輸出枚数の記録であるが、各種資料に残る重量記録では18世紀半ば以降において図表の数値より高くなる。オーガスタ建設の経緯については以下参照。Julie Anne Sweet, ““An Encourager of Industry”: Samuel Eveleigh and his Influence on the Southeastern Indian Trade” *The South Carolina Historical Magazine*, Vol. 112, no. 1/2 (January-April, 2011). オーガスタはジョージア植民地内に建設されたが、そこで集められた鹿皮のほとんどが当初はチャールストンから出荷された。重要な鹿皮輸出港となるサバンナの成長は1760年代以降である。

【図表 2】 チャールストンからの鹿皮輸出量, 5 年平均値 (単位: 枚)



出典: Converse D. Clowse, *Measuring Charleston's Overseas Commerce, 1717-1767: Statistics from the Port Naval Lists* (Washington D.C: University Press of America, 1981), 54-6より作成。

注: この数値はPRO Customs RecordsおよびRecords of the Public Treasurers of South Carolina, Ledger B, 1735-1775, Public Ledger, Duties and Special Fundsのものであるが, 1768年から1772年の数値は重量記録のPRO Customs Recordsでは大幅に上昇する。Braund, *Deerskins & Duffels*, 88-9にあるように加工済みの鹿皮 2 ポンド, 未加工の鹿皮は 3 ポンドで計算すると, 1768年から1772年の 5 年間の平均値は76,795 (皮, 枚数) になる。年度別にみると, 1769年は91,334枚, 1772年に103,899枚, 1772年に103,300枚, と輸出が大幅に増えた年もある。

オーリンズからも数千枚, 輸出されており, 1763年以降イギリス支配下に入ったモービルやペンサコーラからも数千枚, フロリダのサン・オーガスティンからも鹿皮の輸出があった。18世紀半ばには南部全体で500,000ポンド (およそ250,000枚) の鹿皮が毎年輸出されたのをピークに, 18世紀後半にかけて徐々に減少するが18世紀末まで鹿皮取引自体は継続した。²¹⁾ サウス・カロライナ植民地では米の輸出が1720年代から急増し主要作物となり, 鹿皮の輸出額を上回るようになる。さらに1740年代後半になるとインディゴ生産が始まり, イギリスからの補助金による積極的な生産促進により, その輸出額は

1748年以降, 鹿皮を超えてサウス・カロライナ植民地から米に次ぐ 2 番目に多く輸出される作物になった。²²⁾

本節では鹿皮貿易が南東部インディアン部族との取引を出発点に, チャールストンの商人の手に渡り, 海外に輸出されるまでの経緯を18世紀の輸出先と輸出枚数の記録を交えて概観した。次節では鹿皮輸出に携わった商人層について分析する。

²¹⁾ Paul M. Pressly, *On the Rim of the Caribbean: Colonial Georgia and the British Atlantic World* (Athens: University of Georgia Press, 2013) 203-4. Mancall, Rosenbloom, and Weiss, "Indians and the Economy of Eighteenth-Century Carolina," 298-9.

²²⁾ サウス・カロライナの米作については注 7 参照。インディゴについては次を参照。R.C. Nash, "South Carolina Indigo, European Textiles, and the British Atlantic Economy in the Eighteenth Century," *The Economic History Review* 63, no.2 (May, 2010): 362-392; Andrea Feezer, *Red, White and Black Make Blue: Indigo in the Fabric of Colonial South Carolina Life* (Athens: University of Georgia Press, 2013).

IV. 鹿皮貿易商人の分析

1. 資料と研究の背景

本節では、サウス・カロライナ植民地財務局の資料にある1735年から1775年までの鹿皮輸出関税の記録から、チャールストンで鹿皮を取り扱った貿易商人について分析する。この資料は、植民地財務局 (Public Treasurer) がチャールストンから輸出および輸入された関税のかかる商品について、取引を行った商人から徴収した関税の支払いを記録したものである。同資料に記載されている取引商品は輸出関税に関しては鹿皮 (deerskin)、その他皮 (leather) が中心である。最大の輸出作物であった米の関税は1730年以降主としてイギリスで支払われたため、同資料には記されていない。輸入関税についての記録は一般商品 (general merchandize, またはdry goods)、ラム (rum)、奴隷 (negro) がある。これらの商品について、支払われた関税額、取り扱った商人、輸出先または経由地、また多くの場合船長名が記されている。この資料からは41年間で鹿皮貿易について3662の関税支払記録が残され、670の異なる商人・商家による取引が確認できる。²³⁾ この資料の関税記録と商人のリストを紹介したムーアの半世紀ほど前の論文が1点あり、その後の鹿皮貿易の関税について、また鹿皮市場の商人の集中度についての研究や言及はすべてムーアのリストをもとにしている。本稿では、ムーアのリストで省かれた100ポンド未満の関税支払の商人も含めて考察するため、South Carolina Department of History and Archivesに残る元のデータを

扱っている。この原資料を使って鹿皮貿易について分析した研究はこれまでなされていない。²⁴⁾

鹿皮は列挙品目に指定され、イギリスもしくはその植民地にしか輸出できなかった。また、鹿皮をはじめとする獣皮には17世紀から輸出関税が課せられた。こうした輸出入関税は18世紀半ばまでは植民地にとっては最大かつ最重要な収入源であり、植民地のあらゆる経済的負担を軽減する役割を担った。²⁵⁾ 鹿皮の関税額は1691年に未加工の皮1枚当たり3ペンスと定められ、その後1703年には植民地で作られた植民地所有の船で輸出される場合は関税を半分に、さらに植民地が所有するが植民地外で建設された船の場合は関税を3分の2に決定した。1722年には加工済の皮1ポンド以上の重さのものには6ペンスの関税が徴収され、16オンス以下の重さのものには3ペンス徴収された。関税は輸出する商人が支払い、植民地の出納係が集めた。植民

²⁴⁾ W. O. Moore Jr., "The Largest Exporters of Deer-skins from Charles Town, 1735-1775" *The South Carolina Historical Magazine* 74, no.3 (July, 1973). 例えば, Richard Waterhouse や R.C. Nash などが, このリストをもとに鹿皮商人について分析しているがいずれも原資料にまではあたっていない。Waterhouse, *A New World Gentry*, 56-9; R.C. Nash, "John Guerard," 9.

²⁵⁾ 関税はアルコール、食品、木材、獣皮、奴隷の5項目が基本対象となったが、それらの中でさらに80以上の品目に細かく分類されていた。関税は要塞や建築物・教会などの建立、聖職者の給与、年度ごとの公的な支出の補填など特定の用途に使われることが多かった。危機や戦争など想定外の事態の支出には、土地や奴隷などの資産にかかる課税が充てられることが多かった。関税は商品の価値に関係なく固定のものもあれば、従価制のものもあった。Alvin Rabushka, *Taxation in Colonial America* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2008); 702-3. サウス・カロライナ植民地では奴隷輸入関税額が圧倒的に多く、1739年のストノ反乱発生後のように、奴隷の関税を高額に変更して輸入を抑制する政策が取られることもあった。ストノ反乱については以下参照。Peter Charles Hoffer, *Cry Liberty: The Great Stono River Slave Rebellion of 1739* (New York: Oxford University Press, 2010); Mark M. Smith ed., *Stono: Documenting a Southern Slave Revolt* (Columbia: University of South Carolina Press, 2005); 拙稿, 「植民地期サウス・カロライナの奴隷制社会とストノ反乱」『アメリカ史研究』第36号 (2013年8月)。

²³⁾ Records of the Public Treasurers of South Carolina, Journal A, Journal B, Journal C. South Carolina Department of Archives and History (Columbia, SC). この間の交換レートの変動について、資料の扱う1735年から75年の時期はこれまでの研究でも一貫して平均7対1で計算されており、本研究の計算に影響はない。John J. McCusker, *Money and Exchange in Europe and America, 1600-1775: A Handbook* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1978) 220-26.

地期を通して税額が変更になることはあったが、基本的には1枚の鹿皮につき数ペンスと少額で大きな変動はなかった。²⁶⁾

チャールストンでは関税記録から、鹿革貿易に670、一般商品貿易に3929、奴隷貿易に1164の商人が取引していたが、同時期のフィラデルフィアなどとは対照的に、この中で個別の商人・商家の書簡が資料として残されているのは数件に過ぎない。²⁷⁾ ヘンリー・ローレンス、ロバート・プリングル、ジョン・ゲラードの3文書が価値ある資料として現存するが、いずれも鹿皮貿易に関わっていたものの、数多くの商品の取引の中の1つに過ぎないため、それらの文書から得られる情報は多くはない。²⁸⁾ また、大西洋貿易に関わる商人や商家は複雑に絡む商業ネットワークの中で様々な情報を評価・分類しなが

ら活動していたことを指摘した研究は多く、今回の関税記録の分析からも大西洋をまたぐ商人のつながりと取引におけるその重要性は十分確認できる。これまでの大西洋貿易と商人に関する研究を考慮しながら、従来の研究では十分触れられていないチャールストンの鹿皮商人層の特徴と貿易の隆盛、その後の後退について論じる。²⁹⁾

2. チャールストン商人層の特徴

18世紀の記録では、鹿皮貿易は「非常に洗練された上流者の取引で、利益は大きいが成果が出るのはゆっくりで、継続するには非常に大きな資本が必要である」と評されている。こうした同時代文献で見られる評価、個別商人の文書、本節で使う関税記録から、鹿皮貿易で最も利益を上げたのはチャールストンやロンドンにいる「上流者」、一部の富裕商人層であることを検証し、その特徴を確認する。³⁰⁾

チャールストンの商人層は往々にして他の商人とパートナーシップを結び事業を拡大し、大

²⁶⁾ 1691年の法律によって鹿皮や毛皮に関税をかけることが決定する。Clowse, *Economic Beginnings*, 116-118. Moore Jr., "The Largest Exporters of Deerskins," 144-150.

²⁷⁾ 大西洋貿易での商人分析では植民地期から独立期にかけて豊富に個人資料が残るドアフリンガーによるフィラデルフィアの商人層の研究、ハンコックの18世紀ロンドン・アソシエイトの緻密な分析などが先駆的研究としてある。Thomas M. Doerflinger, *A Vigorous Spirit of Enterprise: Merchants and Economic Development in Revolutionary Philadelphia* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1986). David Hancock, *Citizens of the World: London Merchants and the Integration of the British Atlantic Community, 1735-1785* (New York: Cambridge University Press, 1995).

²⁸⁾ Philip May Hamer, George C. Rogers, David R. Chestnut eds. *Papers of Henry Laurens, vol. 1-16* (Columbia: University of South Carolina Press, 1968-1988); Edgar, *The Letterbook of Robert Pringle, Vol. 1,2*; [John Guerard] *Letterbook*, South Carolina Historical Society (Charleston, South Carolina). これら以外では、ジェームス・クロカット、ベンジャミン・ゴディン、サミュエル・エヴェレーらの活動は断片的に記録があり分析されている。他にも一般商品の輸入業で大規模に取引した以下の商人・商家の研究もある。マニゴールは一般商品でチャールストン最大の貿易業を営み、植民地で最も裕福な人物であった。なお、1735-75年間の一般商品の輸入回数は36,000を超え、奴隷貿易は約3,000回関税の支払記録がある。George C. Rogers Jr., *Charleston in the Age of the Pinckneys* (Norman: University of Oklahoma Press, 1980); Maurice A. Crouse, "Gabriel Manigault: Charleston Merchant," *The South Carolina Historical Magazine* 68, no.4 (Oct., 1967): 220-231. Records of the Public Treasurers, SCDH.

²⁹⁾ 商人のネットワークと集中度に関しては特にイギリスの奴隷貿易研究が参考になる。Sheryllyne Haggerty, "Networking with a Network: The Liverpool African Committee, 1750-1810," *Enterprise and Society*, no. 18, vol. 3 (2017) 566-90; John Haggerty and Sheryllyne Haggerty, "The Life Cycle of a Metropolitan Business Network: Liverpool, 1750-1810" *Explorations in Economic History*, no. 48, vol. 2 (2011) 189-206. 他にも以下参照。Emily Buchnea, "Transatlantic Transformations: Visualizing Change Over Time in the Liverpool-New York Trade Network," *Enterprise and Society*, no. 15, vol. 4 (2014) 687-721; Tom Cutterham, "The Revolutionary Transformation of American Merchant Networks: Carter and Wadsworth and Their World, 1775-1800" *Enterprise and Society*, no. 18, vol. 1 (2017) 1-31; David Hancock, "The Trouble with Networks: Managing the Scots' Early-Modern Madeira Trade," *Business History Review*, vol. 79, no. 3 (2005) 467-91; Jacob M. Price and Paul G.E. Clemens, "A Revolution of Scale in Overseas Trade: British Firms in the Chesapeake, 1675-1775," *Journal of Economic History*, vol. 47, no. 1 (1987) 1-43.

³⁰⁾ Malachy Postlethwayt, *The Universal Dictionary of Trade and Commerce*, reprint 1774 edition (New York: Augustus M. Kelly, 1971) in Braund, *Deerskins & Duffels*, 53.

西洋を跨ぎイギリスの商人と業務提携していた。ロバート・プリングルのように、商業上のパートナーは兄弟や親類、親子など血縁中心という場合も多く、プリングルの場合はロンドン在住の兄のアンドリュー・プリングル (Andrew Pringle) がロンドンのカロライナ商人グループの一員で、イギリス側での業務を請け負った。初期の鹿皮貿易に関わり、奴隷貿易では最も利益を上げた商人の1人であるジョセフ・ラッグも、サミュエル・ラッグとそれぞれチャールストン、ロンドンにしながら兄弟の連携で事業を展開した。³¹⁾ 18世紀チャールストン最大の貿易商人として君臨したヘンリー・ローレンスも、1740年代にロンドンに滞在し、元々チャールストンの商人であったジェームス・クロカットの見習いとして働き、ロンドン時代に築いたネットワークがその後の貿易活動の拡大につながっている。³²⁾

³¹⁾ プリングルは関税記録で上位の納税者に登場する商人ではないが、主に米と鹿皮、それ以外にも船舶用品、ラム酒、砂糖、糖蜜、ワインなど多くの商品の輸出入で利益を上げた。ジェームズ・リード (James Reid)、ジョージ・イングリシ (George Inglis) らと事業提携することはあったが、基本的にはパートナーシップを好まず、個人での取引が多かった。1750年代には代議会のメンバーになった。Edgar, *The Letterbook of Robert Pringle, vol. 1, 2*. ジョセフ・ラッグは1720—30年代のロンドンで最も活躍したカロライナ商人であったサミュエル・ラッグの兄弟で、1710年代に二人でチャールストンを拠点にジョセフ・ラッグ&カンパニーを設立し、鹿皮も多く出荷したが、その後ラッグ家は20—30年代に最大級の奴隷輸入業者として活動した。自船および奴隷用の監禁施設を所有し、1725年から39年の間に1,300人以上、35年から39年の記録では4,000人以上の奴隷を運び込んだといわれる。兄弟とも、代議会や商務院 (Board of Trade) で活躍し、サウス・カロライナ植民地の最大級の土地所有者でもあった。David, *Trade, Politics, and Revolution*, Dramatic Personae, xxv. Wood, *Black Majority*, 251; Lorri Glover, *All Our Relations: Blood Ties and Emotional Bonds Among the Early South Carolina Gentry* (Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 2000) 88.

³²⁾ ローレンスのネットワークは広範囲に跨る。Hamer, et al eds. *Papers of Henry Laurens, vol. 1-16*; David Duncan Wallace, *The Life of Henry Laurens with a Sketch of the Life of Lieutenant-Colonel John Laurens* (New York: G.P. Putnam's Sons, The Knickerbocker Press, 1915) David, *Trade, Politics and Revolution*, Dramatis Personae, xxi.

さらに、チャールストンの富裕商人層は代々続く商人・商家の家系であることが多い。初期の鹿皮貿易・奴隷貿易を牽引したジョセフ・ラッグや、1735—75年で最も多く鹿皮を輸出したベンジャミン・ステッド (Benjamin Stead) は2世商人であり、親の代のつながりからイギリス商人との関係を継続していた。こうした2世、3世商人は1740年代までチャールストンの鹿皮貿易を支配するようになる。鹿皮貿易の1750年の時点で上位10の規模の取引を行う商人・商家グループ中、87%が植民地住人の第1世代の直系子孫である。これは一般商品貿易におけるその割合 (65%) や奴隷貿易 (36%) よりもかなり多い。鹿皮貿易がチャールストンの対外貿易の先駆けであり、第1世代が最初に注力した貿易であったことを示している。³³⁾ 18世紀半ばまでは、こうした第1世代の子孫らがチャールストンの富裕商人層の大半を占め、同時に1750年代までその多くは代議会のメンバーも兼任していた。³⁴⁾

また、他の植民地都市にも見られたが、チャールストンにも建設初期からフランス系のユグノー系商人が一定数いた。最初期にチャールストン

³³⁾ Waterhouse, *A New World Gentry*, 60. この値は、Records of the Public Treasurersの関税リストを載せた以下の論文をもとに計算されているが、それぞれ100ポンド以下の関税しか支払っていない商人の省略、チャールストンで関税を支払っているイギリスや西インド滞在の商人をリストから除外、一般商品は最後の10年分はリストから省かれている、など原資料のデータが一部欠落しているので、おおよその傾向を示す数字に過ぎないが、鹿皮が他の貿易に比べて第1世代の子孫が多いことは間違いない。W. Robert Higgins, "Charles Town Merchants and Factors in the External Negro Trade, 1735-1775," *The South Carolina Historical Magazine*, vol. 65 (1964): 205-217; Moore, "The Largest Exporters of Deerskin," 144-155; Stuart O. Stumpf, "South Carolina Importers of General Merchandise, 1735-1765" *The South Carolina Historical Magazine*, vol. 84 (1983): 1-10.

³⁴⁾ Waterhouseによると、1750年代以降、鹿皮貿易の第1世代の子孫の割合は減少する。1721年から1775年までに在職した植民地代議会の構成員の職業分析では、約20%が主に商人、約65%が主にプランターを生業としており、その他弁護士や医師などが10%強を占めた。Waterhouse, *A New World Gentry*, 167-173.

の商人コミュニティ形成に貢献したのはユグノー系商人であり、1680年から1700年にかけて400～500人のユグノー商人がカロライナに到着し、1700年にはチャールストンの商人コミュニティの3割はフランス系ユグノーで占められた。³⁵⁾ 18世紀初頭を代表する商家のゴディン (Godin) 家、18世紀中長く貿易に従事したゲラード (Guerard) 家もユグノー系であった。ユグノー系商家は互いに強固に結びついていた。鹿皮輸出で多く関税を納めたジョン・ゲラード (John Guerard) は父親のジョン・ゲラード・シニアを継ぎ、父親のネットワークと資金力を生かして1730年代初頭からあらゆる商品の取引に関わった。その際、父親の商業上のパートナーであったベンジャミン・ゴディン (Benjamin Godin) と提携し、一般商品やマデイラ産ワインの輸入で利益を上げ、その後新たなパートナーとしてリチャード・ヒル (Richard Hill) と提携すると鹿皮輸出だけでなく、奴隷輸入でチャールストン有数の大商家となる。ヒル&ゲラード (Hill & Guerard) は1735-55年の期間では鹿皮取引で9番目、1743-45年では5番目に多く関税を支払っている。ヒルとのパートナーシップはジョン・ゲラードとトリチャード・ヒルの妹との結婚でさらに堅固なものとなった。1735-55年の間、ジョン・ゲラード個人としても、175ポンドの鹿皮関税を支払っている。ジョン・ゲラードの鹿皮の関税支払いは1740年代で終了し、その後1775年までの間に支払った形跡はな

い。ゲラードは鹿皮貿易から撤退後、ゴディン家と再提携し、イギリスのプールを拠点としたチャールストン貿易商人の2世であるウィリアム・ジョリフ (William Joliffe) と新たにパートナーシップを結ぶことになるが、この提携は鹿皮取引には関与せず、米や船舶用品の輸出、アフリカと西インド諸島両方からの奴隷の輸入、イギリスやマデイラから一般商品やワインの輸入などが中心であった。ゲラード自身はその後、1760年までには完全に貿易から退き、主としてサウス・カロライナの米作プランター業に従事した。ゲラードのようにユグノー系のチャールストンの富裕商人・商家は18世紀半ばも多く、一般商品貿易で1735-75年の間に45,000ポンドを超える最大の関税額を納めたゲイブリエル・マニゴールもユグノー系商人の子孫であった。³⁶⁾

このように、チャールストンでは数世代続く商人や商家がイギリスとのつながりを強めながら、鹿皮を取引する富裕層を形成した。この層はロンドンやブリストルにいるイギリス商人のファクターとして委託販売を主たる取引形態とし、金融支援を受け、クレジット (信用取引) の提供に長けていた。こうした金融面での有利な条件は、チャールストン在住の商人が、インディアンと鹿皮の取引を行う際に、様々な製造品の提供が容易であることから、円滑な取引を

³⁵⁾ Bossy, "Godin & Co." 103. ユグノー系商人研究については以下参照。Bertrand Van Ruymbeke, "The Huguenots of Proprietary South Carolina: Patterns of Migration and Integration" in Greene ed. *Money, Trade and Power*, 26-48; R. C. Nash, "The Huguenot Diaspora and the Development of the Atlantic Economy: Huguenots and the Growth of the South Carolina Economy, 1680-1775" in Bertrand Van Ruymbeke and Randy J. Sparks eds., *Memory and Identity: The Huguenots in France and the Atlantic Diaspora* (Columbia: University of South Carolina Press, 2003), 75-105.

³⁶⁾ Nash "The Career of John Guerard" 6-29. リチャード・ヒルも父親がロンドンをベースにチャールストンで取引をしたチャールズ・ヒルで2世商人である。ヒル&ゲラードは奴隷貿易では1735-75年で10番目に多く関税を納めた奴隷商人の代表格である (約18,000ポンド)。そのほとんどは前半期、1735-55年期の取引で、その間は4番目に多く奴隷を輸入している。Records of the Public Treasurers, Negro Trade, SCDAH. Nash, "John Guerard," 8-10 ; Bossy, "Godin & Co." 6 fn3. ゲラードは1740年代以降、ウィリアム・ジョリフとのパートナーシップで奴隷貿易を中心に活動し、ヒル&ゲラード解体後も個人で1755-75年区分において8,281ポンドの奴隷関税を支払い、奴隷輸入を続けた。晩年はプランテーションを複数経営し奴隷を多く所有していた、典型的な息の長いエリート商人であった。ゲラードのように、鹿皮から徐々に奴隷貿易や米貿易にシフトした例は多い。

可能にした。³⁷⁾

加えて、初期の商人は1707年の植民地代議会 (Commons House of Assembly) で設置が決定したインディアン取引委員会 (Board of Commissioners of the Indian Trade) の委員など植民地のインディアン政策決定に影響を及ぼし得る要職・公職に就いた。³⁸⁾ 1735-55年までの鹿皮関税支払額が最多のサミュエル・エヴェレー (Samuel Eveleigh) は鹿皮貿易で18世紀初頭から成功した大商人であり、1707年には植民地議会の代議員、1712年から15年まではインディアン取引委員会の委員長を務め、1720

³⁷⁾ インディアンとの取引は現金での取引はほとんどなく、1年毎の信用取引で商品を提供していた。Bossy, “Godin & Co.” 101-3, 115; イギリスとチャールストンの商人らは、インディアン取引のリスク軽減のため、融資や貸付の対象を信頼できるパートナー、顧客、親族や親友に限るなど独特の取引文化を形成した。Michael Woods, “The Culture of Credit in Colonial Charleston” *The South Carolina Historical Magazine* 99, no. 4 (October 1998): 358-380. ロバート・プリングルからアンティグアの商人あての書簡に、ブライスという名の地で信用の無い部外者の商人にラムと砂糖の受取と販売が奪われた件について述べられており「ブライスのような人物はここではクレジットも評判もなく、辺境地の小さな店の店主に過ぎず、植民地外の人物であり、最近ジャマイカからやってきて、いくつかの取引に関わってからすぐに逃亡したと聞いた」とあり、部外者との取引に注意を促している。Edgar, *The Letterbook of Robert Pringle, vol. 1* (August 23, 1739) p.127.

³⁸⁾ インディアン行政委員会は現職の代議会議員の中から9名が委員として選出され、トレーダーにライセンスを与え、取引に関する手引書を作成する任務があった。また、同委員会はトレーダー同士の争いや、インディアンとトレーダーからの苦情などに対応する司法的役割を持った。Bossy, “Godin & Co.” 107. トレーダーは同時に一定の規則を遵守する保証金・契約金を支払うことを命じられ、活動範囲も1人のトレーダーにつき特定の1〜2の集落に限定した。Gray, *History of Agriculture*, 136-7. ライセンスは年度毎の契約で8ポンドの費用がかかり、インディアンに対する信用取引の延長、ラム酒の取引も禁止された。規制を守らないトレーダーに対しては罰金や懲役、取引商品の没収などの厳罰を与えた。この1707年の諸規制の制定を、完全な自由取引の終焉と規制の開始の転換点と見ることできる。規制についての攻防は以下も参照。Gary L. Hewitt, “State in the Planters’ Service: Politics and the Emergence of a Plantation Economy in South Carolina,” in Greene et al eds., *Money, Trade and Power*, 53; Stern, *Lives in Objects*, 54; Crane, *Southern Frontier*, 137-154.

年代には王立評議会メンバーにもなった。³⁹⁾ ジョン・ゲラード・シニアも18世紀初頭にインディアン取引委員会のメンバーとなり、他にもジョセフ・ラッグ、チャールズ・ヒルなどが初期のインディアン取引委員会のメンバーとして名を連ね、同時に鹿皮貿易にも関わっていた。18世紀初頭までの鹿皮を扱う商人は、インディアン奴隷の取引にも従事していることが多く、インディアン取引委員会では鹿皮およびインディアン奴隷の取引を同時に、円滑に行うための規則や政策を決定した。委員であったベンジャミン・ゴディンは鹿皮貿易とインディアン奴隷取引両方で利益を上げていたが、ヤマシー戦争後にインディアン奴隷の取引が実質上終焉すると、鹿皮貿易に集中すると同時に、ジョン・ゲラードと共同でアフリカからの奴隷貿易に関わるようになった。⁴⁰⁾

鹿皮を出発点に、他の貿易への参入を続けて

³⁹⁾ ブリストル出身のエヴェレーはインディアン取引に最初に信用取引 (クレジット) を導入した人物としても知られる。Sweet, “Encourager of Industry” 6-8.

⁴⁰⁾ ヤマシー戦争の原因の一つがインディアン側のインディアン奴隷制への恐怖・不満であった。戦争後、インディアン奴隷制は終焉するが、ほぼ同時並行してアフリカからの植民地への奴隷輸入が増加し始め、奴隷制は完全なアフリカ奴隷の制度へと置き換わっていく。インディアン奴隷取引に関わったトレーダーや商人らの特徴・思想はのちの黒人奴隷制の奴隷貿易が中心となる社会においても継承され、インディアン奴隷制の商人らが次世代において黒人奴隷貿易でも利益をあげたとも考えられている。Brown, “Early Indian Trade,” 126-7. インディアン奴隷制については近年、研究が多く発表されている。代表的なものとして以下がある。Allan Galloway ed. *Indian Slavery in Colonial America* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 2009); Christina Snyder, *Slavery in Indian Country: The Changing Face of Captivity in Early America* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2010); Andres Resendez, *The Other Slavery: The Uncovered Story of Indian Enslavement in America* (Boston, MA: Mariner Books, 2017). なお、サミュエル・エヴェレーはサミュエル&ジョージ・エヴェレーとして1735-55年の区分では最も多い5,300ポンドほどの鹿皮関税を支払い、サム・エヴェレーとしても6番目に多い1,913ポンド扱っている。後期の区分 (1755-75年) にはエヴェレー家は登場しない。Records of the Public Treasurers, Deerskin Trade, SCDAH.

貿易対象商品を拡大し、商人として長く活動したのもいたが、蓄積した富をもとにプランテーションを購入、または先代から相続してプランテーションを運営し、18世紀半ばにかけて隆盛する米やインディゴの生産でさらに利益を上げる例も多く見られた。特に鹿皮に関しては、18世紀半ばには既に最盛期は超えつつあり、初期に活躍した商人らが徐々に貿易から手を引き、他の貿易やプランテーション経営に軸足を移していった。鹿皮輸出枚数も、18世紀半ば以降減少に転じていく。

上記のように、最も成功したチャールストンの鹿皮商人は、鹿皮だけに特化することなく、あらゆる貿易商品を扱いながら複数の商人とパートナーシップを結び、イギリス側の商人とも緊密な関係性を維持して貿易を円滑に行った。この点を、関税記録からさらに検証する。

3. 鹿革貿易商人の分析, 1735-1775年

ここでは植民地商人が鹿皮輸出の際に支払った関税の記録をもとに、チャールストンの鹿皮貿易商人層の特徴を明らかにする。1735年から1775年までの41年間、670の商人または商家が鹿皮を輸出し、3622の輸出関税記録が残されている。鹿皮の大半は前節で見たように、ロンドンやブリストルに出荷され、合計36の到着地が記録されている。この間、470近くの商人は100ポンド以下の関税しか支払っていない。⁴¹⁾

1735年から1775年全体で鹿皮の関税支払い額の上位20までが【図表3】で示されている。こ

の41年間で20年ずつの時期(1735-55年, 1755-1775年)に分けた上位10商人が【図表4a】【図表4b】である。さらに、およそ15年ごとの変化を見るため、1743-45年, 1758-60年, 1773-75年と分けた上位10商人の表が【図表5a】【図表5b】【図表5c】である。

【図表3】1735-1775年の鹿皮輸出関税支払い額, 上位20商人・商家

商人・商家名	関税額		
	pounds	shillings	pence
Ben Stead	7139	3	6
Samuel & George Eveleigh	5301	18	3
Stead & Evance	4962	17	6
John Gordon	3629	17	0
Austin & Laurens	3549	18	3
Macartan & Campbell	3224	5	9
John Mcqueen & Co	2888	10	6
Ancrum Lance & Loockock	2882	4	3
Smith & Cossens	2206	13	9
Sam Eveleigh	1913	14	9
Mckinzie & Roche	1696	16	0
Hill & Guerard	1636	10	6
John Savage & Co	1440	3	6
Simmons Smith & Co	1417	9	0
Austin Laurens & Appleby	1398	19	0
Middleton & Brailsford	1384	9	9
Binford & Osmond	1359	14	3
Joseph Wragg & Co	1308	11	0
Cattell & Austin	1239	16	6
Mathew Roche	1128	2	9

出典: Records of the Public Treasurers of South Carolina, Journal A (1735-1748), Journal B (1748-1765) Journal C (1765-1775). 1748年3月25日から9月29日までの記録は資料から欠落している。

⁴¹⁾Records of the Public Treasurersをもとに鹿皮取引商人をリストした論文がMoore, "The Largest Exporters of Deerskins," 144-150. ムーアは664の商人あるいは商家が鹿皮を輸出し、3621の輸出記録があるとしているが、本稿では原資料に戻って確認したところ、670の商人・商家と3622の輸出記録を確認した。この記録は3月から9月、9月から翌年3月と1年を3月はじまりの2期で記録しているため、例えば1735-55年, 1755-1775年という2区分は、前半が1755年3月まで、後半を1755年3月からで分けている。従って、二重に計算されている関税はない。Records of the Public Treasurers, SCDAH.

【図表 4 a】1735－1755年の鹿皮輸出関税支払い額，上位10商人・商家

商人・商家名	関税支払い額		
	pounds	shillings	pence
Samuel & George Eveleigh	5301	18	3
Stead & Evance	4962	17	6
Ben Stead	4278	13	0
Austin & Laurens	2344	8	3
Smith & Cossens	2206	13	9
Sam Eveleigh	1913	14	9
Macartan & Campbell	1815	15	3
Mckinzie & Roche	1696	16	0
Hill & Guerard	1636	10	6
John Savage & Co	1440	3	6

出典：Records of the Public Treasurers of South Carolina, Journal A (1735-1748), Journal B (1748-1765).

【図表 5 a】1743－45年の鹿川輸出関税支払い額，上位10商人・商家

商人・商家名	関税支払い額		
	pounds	shillings	pence
Mckinzie & Roche	1164	19	6
Samuel & George Eveleigh	866	6	6
Stead & Evance	548	6	0
John Savage & Co	478	16	6
Hill & Guerard	402	3	6
William Yeomans	337	9	9
Smith & Cossens	317	16	0
Simmons & Smith	299	9	3
Wragg & Lambton	238	5	0
Thomas Smith	142	4	9

出典：Records of the Public Treasurers of South Carolina, Journal A (1735-1748).

【図表 4 b】1755－1775年の鹿皮輸出関税支払い額，上位10商人・商家

商人・商家名	関税支払い額		
	pounds	shillings	pence
John Gordon	3629	17	0
John Mcqueen & Co	2888	10	6
Ancrum Lance & Loockock	2882	4	3
Ben Stead	2860	10	6
Macartan & Campbell	1408	10	6
Austin Laurens & Appleby	1398	19	0
Austin & Laurens	1205	10	0
Middleton & Brailsford	1190	16	9
Henry Laurens	971	13	3
William Hopton	928	17	6

出典：Records of the Public Treasurers of South Carolina, Journal B (1748-1765) Journal C (1765-1775).

【図表 5 b】1758－60年の鹿皮輸出関税支払い額，上位10商人・商家

商人・商家名	関税支払い額		
	pounds	shillings	pence
John Mcqueen & Co	1752	4	0
Ben Stead	854	8	0
Middleton & Brailsford	752	12	9
Smith & Brewton	400	13	9
Austin & Laurens	400	0	0
Ancrum Lance & Loockock	384	16	3
Austin Laurens & Appleby	255	8	6
Laughten McGillivray	237	10	0
John Wagner	236	7	0
Robertson & Baillie	215	19	0

出典：Records of the Public Treasurers of South Carolina, Journal B (1748-1765).

【図表 5 c】1773-75年の鹿皮輸出関税支払い額, 上位10商人・商家

商人・商家名	関税支払い額		
	pounds	shillings	pence
Leger & Greenwood	225	7	6
Kershaws & Co	126	3	9
Henry Rugeley & Co	96	4	3
Samuel Gordon	95	16	0
Joseph Atkinson	78	10	0
Rowland Rugeley	76	8	9
Robert Stott & Co	65	17	0
Paul Townsend	63	11	0
John Owen & Co	56	18	6
Smith & Inglis	54	3	0

出典: Records of the Public Treasurers of South Carolina, Journal C (1765-1775).

この資料は1735年以降しか記録がないため、17世紀末から18世紀初頭の最初期の鹿皮貿易については分析できない。最も早く鹿皮貿易で成功した商人の一人でユグノー系商人であったベンジャミン・ゴディンは、1735年より以前に商人としては引退し、プランテーション経営に移行した。ジョン・ゲラード・シニアも鹿皮貿易で成功したが、1714年に亡くなり、18世紀半ばに鹿皮貿易や奴隷貿易で活躍したのは先に見た息子の2代目のジョン・ゲラードであった。

これまでの大西洋貿易商人の研究や他都市の商人についても見られるが、上位層の商人・商家は複数の事業名で活動していたことが確認できる。単独で取引を行う商人もいれば、別名のパートナーシップ会社を設立して平行して事業展開を行っている例もある。全期間を通して最大の支払額であるベン(ベンジャミン)・ステッド(個人)はステッド&エヴァンス(Stead & Evance)としても3番目にも名を連ね、全体で2番のサミュエル&ジョージ・エヴェレー(Sam & George Eveleigh)は10番目にサム・エヴェレー(Sam Eveleigh)が個人で入って

いる。ジョージ・オースティン(George Austin)はオースティン&ローレンス(Austin & Laurens, ヘンリー・ローレンスとのパートナーシップ)、オースティン、ローレンス&アップルビー(Austin, Laurens & Appleby)でも上位に入り、ジョージ・オースティン個人でも約797ポンドの関税を支払っている。⁴²⁾

ヘンリー・ローレンスはジョージ・オースティンの義兄にあたり、ジョージ・アプルビー(George Appleby)はオースティンの甥であったことから、彼らも婚姻・血縁関係で商家としての地位を固めていたことがわかる。オースティンはベンジャミン・ステッドやサミュエル・エヴァンス(Samuel Evance)とも血縁関係にあり、チャールストン商人層の名家を築いていた。⁴³⁾

多くの貿易を掛け持ちする例は先にも見たが、鹿皮の取引規模が大きな商人は、他の商品の取引も行っている例も多い。例えば、1735-1775年間の奴隷輸入でパウエル、ホプトン&カンパニー(Powell, Hopton & Co.)に次いで2番目に高額の関税を納めていたオースティン&ローレンスは、鹿皮貿易でも5番目に多く関税を納めている。⁴⁴⁾ 鹿皮貿易の上位に登場するステッド家、エヴェレー家、ジョン・ゴードン、ジョージ・オースティン、ヘンリー・ローレンスらは

⁴²⁾ オースティン個人で支払った約797ポンドの関税額は全体の30位である。ヘンリー・ローレンスも1057ポンドの関税を個人名で支払っており、全体の22番目に多い。Records of the Public Treasurers, Deerskin Trade, SCDAH.

⁴³⁾ オースティンは1760年代に貿易業から引退し、イギリスで隠遁生活に入る。David, "James Crokatt's," 160. サミュエル・エヴァンスはステッド&エヴァンスだけでなく、Stead, Evance & Co., Stead, Evance and Selwinの事業名でも関税支払いが確認できる。Records of the Public Treasurers, Deerskin Trade, SCDAH.

⁴⁴⁾ オースティン&ローレンスは奴隷貿易で1735-75年間、およそ45,500ポンドの関税を支払い(1位のパウエル、ホプトン&カンパニーは約46,500ポンド)、鹿皮では5番目で3,550ポンドほど支払っている(鹿皮で最も多く支払ったベン・ステッドが約7,139ポンド)。奴隷関税が圧倒的に多いことが示される。Records of the Public Treasurers, Negro Trade, Deerskin Trade, SCDAH.

鹿皮に限らずあらゆる商品の取引で活躍した大商人であり、一般商品や奴隷の取引でも上位の関税を納めている。⁴⁵⁾ チャールストンの奴隷輸入は、ヘンリー・ローレンス、ジョージ・オースティン、マイルス・ブリュートン (Miles Brewton)、ジョージ・イングリシ (George Inglis) ら10人ほどの商人とそのパートナーシップ会社によって全体の40%近くをこの間占めていたことはこれまで研究によって言及されている。一方、鹿皮貿易では、前半期の上位8商人、後半期の上位8商人の取引の集中度はそれぞれ39%と36%であり、全期間を通しては30%である。⁴⁶⁾ 奴隷貿易に比べて取引規模が小さく、参入障壁も低く、関税支払額も大きくなかった鹿皮貿易は、チャールストンの成長とともに増えた商人の数に伴い、関税を支払った商人数は増えている。1735-55年では関税を支払った商人・商家が合計329であったのが、1755-1775年では380になり、新規参入・他業種や他貿易との

兼業の容易さ、チャールストンの取引規模の拡大などにより、多くの商人が参入した結果が反映されていると言えよう。⁴⁷⁾

一方、鹿皮貿易だけに特化した大商人・商家は多いとは考えにくい。むしろ、鹿皮だけを輸出した商人は、取引規模が小さく、収入の多くを他の貿易やプランテーション経営などから得て、収入を補完する取引の一つとして鹿皮に投資した可能性が高い。100ポンド以下の少額の関税しか支払っていない商人が全体の7割も占めており、彼らが鹿皮貿易収入に依存していたとは考えにくい。実際、収入の大半がプランテーション作物の輸出であったプランターの中にはトレーダーを雇って鹿皮取引を行うものもあり、スタンプは彼らをプランター・トレーダーと呼んで区別した。⁴⁸⁾

これらの記録から、18世紀前半までにはチャールストンの輸出入貿易では一部の商人が富裕商人層を形成し、強い影響力を持っていたと言える。富裕層の商人は自家船、自家倉庫などをもち、信用貸付や長期の投資も可能な十分な資金力、イギリス商人との強固な関係を継続しながら、貿易のかんりのシェアを占めていた。鹿皮貿易であれば、上位の商人はインディアンが消費する各種取引商品1年分を前もって購入できる資金、インディアン領土から鹿皮を運搬する手段を所有し、有能なトレーダーを複数人抱えるなど、円滑に貿易を行う有利な条件を持ち合わせていたと考えられる。1つの貿易で成功し富を蓄積すると、チャールストンの商人層の

⁴⁵⁾ チャールストンのエリート層の血縁関係については Glover, *All Our Relations*, 89.

⁴⁶⁾ 鹿皮の商人の集中度はRecords of the Public Treasurers, SCDAHの記録から算出。同じ資料で奴隷貿易の商人の集中度を算出すると、前半期の上位8人は60%を超えるが、後半期は上位8人で40%ほどであり、全期間を通すと40%を切る。奴隷商人の市場集中度については他に、Glover, *All Our Relations*, 91; R.C. Nash, "South Carolina and the Atlantic Economy in the Late Seventeenth and Eighteenth Centuries," *Economic History Review*, vol. 45, no. 4 (No. 1992): 677-702; R.C. Nash, "The Organization of Trade and Finance in the Atlantic Economy: Britain and South Carolina, 1670-1775," in Greene et al eds., *Money, Trade and Power*, p. 74-107; Nash, "Organization of Trade," in Coclanis, *The Atlantic Economy*, 95-151. Peter A. Coclanis and Tomoko Yagyu, "Mercantile Concentration in Eighteenth-Century Charleston: A Preliminary Exploration" paper delivered at the Annual Meeting, Social Science History Association, Minneapolis, Minnesota (November, 2006). マイルス・ブリュートンとヘンリー・ローレンスは複数の船を共同所有していた。Glover, *All Our Relations*, 94. 一般商品の貿易は1735年から1775年で約4,000商人が確認できるが、上位はオースティン&ローレンス、ステッド&エヴァンス、ジョン・サヴァッジなど鹿皮貿易の上位層と重なる。Records of the Public Treasurers, General Merchandize, SCDAH, Journals. Gloverは23の商人・商家が鹿皮貿易の13%を支配した、とMooreのリストをもとに計算している。Glover, *All Our Relations*, 89.

⁴⁷⁾ 新規参入の容易さでは、一般商品の貿易が最も容易であり、そのため18世紀半ばには一般商品の取引は飽和状態になり、商品価格を押し下げて一部商人を苦境に陥れた。チャールストンの大半の商人は一般商品に分類される商品の輸入には関わっていたと考えられる。奴隷貿易の方が支払う関税額も高く、初期費用やクレジット準備の面で鹿皮貿易よりも参入障壁は高かったといわれる。Coclanis and Yagyu, "Mercantile Concentration".

⁴⁸⁾ Stuart O. Stumpf, "Merchants of Colonial Charleston, 1680-1756" (Ph.D. diss., Michigan State University, 1971) 18-19, 40-41.

パートナーシップ・血縁関係による緊密なつながりを利用し、他の貿易に参入することを容易にした。鹿皮貿易は他の貿易より早く開始し、最盛期も早く迎えたが、鹿皮貿易で財を成した商人らは、それ以外の貿易への進出や、貿易以外の道筋を辿った事例が確認できる。

1740年代後半以降、相対的に鹿皮の輸出が後退したと並行して、それまで鹿皮貿易を牽引した大商人たちが退いていった。そうした商人らの多くは別の貿易、特に隆盛期にあった奴隷貿易に投資対象を移すか、収益の見込みが高い米作やインディゴのプランテーション経営に特化するか、あるいはイギリスのカロライナ商人として活動の拠点を移す例などが見られた。⁴⁹⁾ 1760年代になると鹿皮貿易で商人とインディアン間を仲介したトレーダーへの規制が緩み、トレーダーの活動が自由化されその数も増えて競争が激化するなど、従来の鹿皮取引の秩序は崩れていく。⁵⁰⁾ 植民地末期になるにしたがって

上位層の納税額の減少がみられること、さらに1735年-55年の関税記録が1954あるのに対し、1755-1775年では1664に減少していること、また15年ごとの変化でも、1743-45年には242の記録があるが、1758-60年では174、1773-75年では165とやはり関税記録数自体が減少していることから、貿易の後退傾向は読み取れる。

上記資料分析【図表5c】1773-75年の上位を占める商人はそれまでの区分での上位層とは異なってくるが、その点も上記説明と合致する。鹿皮貿易を初期に牽引した商人やその後継者らはこの時期には既に別の事業や貿易を主軸としているか、引退していることもあり、この時期にはエントリーがない。前節でみたように、チャールストンからの鹿皮の輸出量は植民地末期にかけて減少していく。同時に、海外市場において鹿皮は飽和傾向にあり、鹿皮価格は1733年から1769年にかけて27%下がり、長年の狩猟で南部のオジロジカの総数自体も減少していた。また、植民地末期にはチャールストンが南部唯一の鹿皮の輸出港ではなくなり、近隣のサバンナやモービル、ペンサコーラ、ニューオーリンズなどからの輸出額がチャールストンに並ぶほどになっており、チャールストンを迂回した輸出ルートが出来ていた。⁵¹⁾ このような複合的な要因から、チャールストンの鹿皮輸出は減少していったと言える。

⁴⁹⁾ 18世紀ロンドンにはカロライナとの取引に特化した「カロライナ商人」と呼ばれる商人集団が生まれ、ロイヤル・エクスチェンジ（王立取引所）に拠点をもち、カロライナ商人が集会を開くカロライナ・コーヒー・ハウスがシティ区域のバーチン・レインにできた。カロライナ商人と呼ばれた商人層は少数の、チャールストンと個人的なつながりのある商人や、チャールストンやサウス・カロライナ植民地に滞在し貿易に携わった経験のある商人から構成された。このグループは18世紀半ばにはジェームス・クロカット、ジョン・ベスウィック（John Beswicke）、リチャード・シュブリック（Richard Schubrick）、ジョン・ニコルソン（John Nicholson）、チャールズ・オグリビー（Charles Oglivie）らが支配的地位にあった。ジェームス・クロカットは1735年から1739年の間では最も多く鹿皮を輸出した商人であり、その後ロンドンに戻っている。David, *Trade, Politics, and Revolution*, 32; David, "James Crockatt's" 111, 153-161. 富裕なカロライナ商人は大西洋を横断できる船を所有し、輸出入品を運搬することができたが、他の小規模商人に船内スペースを貸しだすのも収入源の1つであった。ヘンリー・ローレンスをはじめ、多くの商人が自船を持ち、パートナーや親族を中心に共同で出荷した。

⁵⁰⁾ Stern, *Lives in Objects*, 89. 1763年の王立宣言（royal proclamation）はチャールストンにも鹿皮貿易にも大きな影響があった。この後、インディアン取引に関する法律が改正され、植民地の住民は保証金さえ支払えばインディアンと取引するライセンスを得ることができ、特定のエリアに活動を限定されることもなく、活動範囲は自由になった。それまでの、トレーダーの人数をライセンスによって絞り、かつ取引する地域も限定していた制度は改正され、経験のない野心的な住人がライセンスを得てインディアン領土に侵入し、内陸に無秩序な人間が溢れた。Braund, *Deerskins & Duffels*, 99-100, 102-5.

⁵¹⁾ Sellers, *Charleston Business*, 169; Braund, *Deerskins & Duffels*, 53-4, 58. 植民地末期のチャールストンの鹿皮はフランスの高級市場向けであり、サバンナとの競合はなかった。チャールストンの鹿皮が1ポンド当たり2.3シリングの利益を上げたのに対し、サバンナのそれは1.7シリングと市場価値に差があった。1760年代以降の記録では、1768年にはサバンナからの鹿皮の輸出額が306,510ポンド、チャールストンからは158,742ポンド、モービルとペンサコーラ合わせて92,346ポンドとサバンナがチャールストンを逆転している。その傾向は1770年代前半も続くが、1774年にはサバンナの輸出が落ち込み151,903ポンド、チャールストンが233,537ポンド、モービルとペンサコーラで合計313,656ポンドとなっている。Pressly, *On the Rim*, 203-20.

V. 結び：鹿皮貿易の意義と課題

本稿では、サウス・カロライナ植民地およびその最大都市チャールストンにおける鹿皮貿易の輪郭と貿易に関わった商人の特徴を、18世紀の植民地政府が徴収した関税支払い記録から分析した。これまでの研究で十分に活用されてこなかった資料から、鹿皮貿易の特徴を確認すると同時に、新たな視点や課題もあわせて検討することができた。

鹿皮貿易は内陸部のインディアンをヨーロッパの諸帝国の支配力と市場拡大の最先端に取り入れ、植民地人とインディアンの長期的な交易の基盤を作り、その産物を大西洋経済圏の重要な輸出品としたことの意義は大きい。鹿皮取引は当初は周辺インディアンの鹿の捕獲にヨーロッパ側が依存し、左右される状況で進んだが、インディアンが主体的に貿易に影響を及ぼした時期は、本稿の主たる史料である関税記録が扱う時期より以前に終焉していたであろう。最大の輸出商品となった鹿皮貿易に対しイギリス商人は投資を本格化し、携わる商人層の成熟、インディアンへの商品・資金提供の規模も拡大し、鹿皮貿易は徐々に植民地に有利に展開した。輸出は18世紀半ばまで拡大し続けるが、その時点では既にIV章で分析した大商人らによるチャールストンの貿易の支配が定着し、サウス・カロライナ植民地の貿易は米・インディゴ、奴隷が中心となり、鹿皮は2次的な輸出品として後退していく。インディアン側は、貿易で得られる物品・商品への依存度が高まり、商人は交渉を有利に進めることが容易となり、鹿皮貿易は規制が緩い参入しやすい貿易へと低落した。こうした貿易の転換については、本稿では深く触れられなかった貿易を円滑に行うための植民地政府の対策、インディアン社会との関係構築、他のヨーロッパ帝国との攻防、インディアン側の鹿の捕獲状況、植民地側との交渉、取引による部族社会の変容などを含めた分析を要する。鹿

皮取引とその貿易を軸にサウス・カロライナ植民地の初期の発展とその後の貿易の展開、特質の連続性・断続性の十分な検討には、植民地とインディアンとの長期的な関係についての理解が不可欠であろう。

しかしながら、本稿の分析から言えるのは、鹿皮貿易はサウス・カロライナ植民地の最初の重要な輸出品として、その後の植民地の貿易体制や政策、商人層の形成やその特徴に大きな影響を与えたことである。特に鹿皮貿易で利益を上げた商人は、多様なパートナーシップを植民地とヨーロッパ両方において複雑な網目のように形成しながら、ヨーロッパ商人と緊密なネットワークを維持し、さらには血縁・親族・徒弟などのつながりも通して、大商人・商家へと成長していった。鹿皮貿易が先導してサウス・カロライナ植民地の貿易を開拓し、多くの商人が貿易に関わる体制を作り、大西洋経済におけるチャールストンとサウス・カロライナ植民地の位置づけを明確にしたことは多大な貢献である。また大商人・商家は何世代にも渡る富裕なエリート層を形成し、貿易だけでなく植民地政府内でもその権力を強化した。

さらに、チャールストンの鹿皮貿易が拡大し、商人が長期的な投資で利益を得られるようになると、商人層が他の貿易へ参入する道筋も作られた。鹿皮貿易で利益を上げた大商人がその後、奴隷貿易をはじめ、米やインディゴの輸出でも鹿皮貿易での経験、豊富な資金力、緊密なネットワークを生かしてチャールストンの貿易を牽引した。鹿皮貿易の停滞後も、サウス・カロライナ植民地の繁栄が植民地時代の間、継続し得たのは鹿皮貿易が最初に貿易の礎を作っていたことが重要であったと言えよう。